



ネイチャーなら

《わたしたちは大和の自然を愛します》

発行2012年10月1日

10月号・第129号

奈良・人と自然の会

会長 藤田 秀 憲



§ § § § §

Contents

§ § § § §

復興への参加『力』……………	①②	里山の今・ならやまの獣……………	⑫
リレー随筆・お元気ですか！……………	③	やさしい昆虫講座②④……………	⑬
イベントレポ1……………	④	鳥シリーズ&地域情報……………	⑭
イベントレポ2……………	⑤	美味旬感・奈良学クイズ……………	⑮
イベントレポ3……………	⑥	自然俳句……………	⑯
イベントレポ4……………	⑦	癒しの散歩道&ならやま茶論……………	⑰
光仁天皇陵に参拝して思う二・三のこと	⑧	青垣春秋・遣隋使と日本外交……………	⑱
Monthly Repo.ならやま……………	⑨	ならやま景観整備&情報BOX……………	⑲
里山の今・自然観察レポ・Galleryならやま	⑩	行事案内……………	⑳
里山の今・ならやまピックス……………	⑪	幹事会報告・ペン画に寄せて・編集後記	㉑

復興への参加「力」

環境基金助成団体交流会報告

顧問 阿部和生

2012年度上半期・三井物産環境基金助成団体交流会が、福島県郡山市で9月12日～13日に実施され参加し、その後現地を訪れました。東日本大震災と原発事故による大被害・大被災があり、その復興・復旧へのNPO諸団体の取り組みとその成果・進捗状況についての報告・議論がなされました。

高知県、兵庫県～北海道に亘る地域の皆さん等74団体104名が参集し基調講演の後、多くの分科会に分かれ、それぞれの事例報告を聞き、それに基づく少人数のディスカッションと総括報告がなされました。今回一般活動助成案件は少なく、復興活動助成・復興活動研究助成の諸団体の参加が大半でした。参加者の特徴は、東京大学をはじめとする各国立大学や東北各地の大半の大学が、何らかの形で参加されていること、大学とNPOとのコラボレーションも多いことなどです。

東京農業大学の方は、「農業大学として如何に復興に関われるか、そして成果を上げられるか考えろ」という学長の「激」があり応募し、復興へのお手伝いが始まったと語っておられたことが印象に残りました。行政が多忙を極める中で、手の届かないところを、大学とNPO法人が協働し、復興への参加「力」になるという事でしょう。そこには、大学の蓄積と専門性、大学生を巻き込む広がりに加えて、NPOの特徴を生かした迅速な取り組みがあり、はっきりと成果を上げていました。

大地震、大津波の自然災害に加え、原発事故という人災を抱える福島県では 1年半過ぎた今も、10万人の方々が県内で避難生活を余儀なくされ、さらに4万2千人の人々が県外



46都道府県に移住避難されている現状、3・11の被害が現在でもさらに継続拡大している現実が報告されました。あまりの被害に遅々とした歩みを余儀なくされています。

地震・津波・原発・風評・風化・消費の六重苦と表現しておられ、その人々の早期の帰郷がかなうとは考えられない状態です。自治体が被災し、役場が地域外に移転していること、放射能に至っては、30年という長期の関わり合いがあること等、予算が付いたらそれで解決とはならない現実が垣間見えます。

チェルノブイリ原発事故の後をリサーチし、救援をされてきた団体は、被災地福島にいち早く現地に入り、放射線量の測定を行い、メッシュ地図に落とし込み、目に見えない線量の周知や対策の広報に取り組まれています。青森県八戸から福島県相馬市まで300km間にある「藻場・干潟・海底」写真撮影による状況調査、漁場の状況の調査をされ、地震で抉られた海域での新しい「海藻の発生・成長」を捉え、また大量の稚魚の存在、プランクトンの発生を撮影報告し、漁業組合への資料提供がなされています。



うちひしがれていた漁民が「また漁ができる」と大きな光を見出し活力を蘇らせた活動、地産地消の道の駅では、販売野菜の徹底した線量調査を行い、その公表を通して安心・安全の提供をなされる等、実に生活に密着した成果が報告されました。セシウム137の野菜への蓄積はトマト、カボチャ、ナスは小さく、カラシナ、クレソン、キャベツの値が大きい等判断材料を常に提供しています。

いずれ「物産」からとりまとめ報告書が出されますので期待してください。

一方現地の悩みは、単純なものではありません。街の復興計画が例えば提案されたとしても、一度離れた次世代の若者が、戻ってくる保証はありませんし、少子化による人口減という未来をも勘案した活きた復興計画作りがなされなければなりません。予算を付ければ学校や幼稚園は作れるでしょう。だが、避難している方々がいつ戻れるのか、戻らないかもしれない、生徒が集まる見込みがありますか？と問いかけねばなりません。簡単に見通せるものではありません。

沈下した農地の除染、3mにも及ぶ土盛りをして農業の再生はできるのか？完成するまでの年月をどのようにして待つのか…、等多くの難題が覆いかぶさっています。8000人の河口集落が一瞬に消え去り、街の賑わいどころ

豊かな農地であった



か、小学校・幼稚園すら持ち去られた名取市閉上（ゆりあげ）地区のお話し惨状には、言葉もありません。それでもクロマツの防潮林の再生に向けて地道な活動もスタートし、コンクリートの防壁に変えて、直根が伸びる施業を行い植栽する計画が、再び行われようともしています。「苗木作りが大変だ…」とつぶやかれていました。

記録し情報を発信する事、専門性を生かした活動への取り組み、長期にわたる被災地への「依り添った活動」等が期待されています。情報発信の混乱から信用を無くしてしまった放射線量基準値のような愚を避けねばなりません。悲惨の中から希望を見だし、次の時代を見据えた企画立案が必要とされています。

仮設住宅



▲基調講演「福島の復興とNPOの役割」



「人と自然の会」との出会い
永井 幸次

還暦を迎え、仕事もひと段落ついたのが今から7年前。これからは、今までほとんど経験のなかった海外旅行や自然と触れ合う時間など、やってみたかったことにどんどんチャレンジしていきたいと思っていた矢先、油絵仲間の小田さんが「シニア自然大学」に行ってみてはどうかと勧めてくれましたが、気軽な感じで自由に参加できそうな「奈良・人と自然の会」の存在を知り、早速入会しました。最初は例会のみに参加していたのですが、歴史を偲び、野鳥、草花など観察できる楽しい企画が盛りだくさんで、行くたびにいろいろな事を興味深く学ぶことができました。といっても年に3、4回くらいしか参加できませんでしたが(笑)。

4年前にならやま里山林プロジェクト予定地に行った時に、一面笹藪で覆われていて、これを整地すると言っておられたことにも半信半疑で聞いていましたが、去年くらいに久しぶりに参加した際に、以前のならやま里山からは想像できないくらい整備されていて、驚愕しました。人と人の力を合わせ、地道な努力をすることに勝るものはないなと感心し、自分もその活動に貢献したいなという思いになりました。

去年、木曽路・赤沢休養林の一泊バス旅行に参加した時、最初は知らない人が多く少し不安でしたが、赤沢美林散策、夜の宴会等で打ち解けられ楽しい時間を過ごせました。この旅行に参加したことがきっかけとなり、今年に入って月に2～3回、ならやま里山林プロジェクトに参加するようになりました。最近では、羽尻さんのやっているペタキンの池掘りを手伝ったり、なすび、サツマイモ、田植え、除草いろんなことをさせてもらって、今では生活の中の一部となりつつあります。今後は、ならやま及び歴史クラブに時間が許す限り参加したいなと思っています。



生駒のみどりと私

磯貝 猛

先日、みどり関連の先輩から「林と森」の意味(違い)はわかりますか?との質問に??のマークが頭いっぱい広がりました。

「皆さんいかがですか」

結論:人の手の入っているのが「林」すなわち【人工林】や【雑木林】、自然に生えているのが「森」すなわち【自然林】や【原生林】など、では「里山」とは集落の周囲の斜面にある畑や雑木林。

私は平成5年の夏に奈良;学園前から生駒市へ引っ越してきました。今年で19年になりますが市内のみどりは年々減少傾向にあります。生駒市のデータでは市全域の緑被面積は平成11年度67%が20年では61%、市街化区域内では36%が26%に減少しています。

実は川井顧問と5年前に生駒市のある委員会でご一緒させていただき、緑の保全に関して徹底的に仕込まれました。その結果現在まで委員会に残り、街なかの緑の保全活動を実践する目的でボランティア団体=「いこま宝の里」を3年前に立ち上げました。

会の事業の一つは生駒市から使用許可を得て活動しております。「イモ山公園樹林」の整備も3年経つと樹林内が明るくなり、去年はササユリや春蘭なども見受けられました。二つ目は市内の小・中学校20校の校内林の整備活動です。学校の中庭や玄関付近の樹木は、生駒市で管理されていますが、グランドや建物外周等の樹木は、学校創立以来殆んど手が入っていないところが多く、整備後に明るくなった校庭で、子供たちが楽しそうに走り回っております。本年6月で18校の整備が終わり、延べ約700名の会員や地元の方々の協力を得る事ができました。三つ目は子供たちとの里山体験や工作などのイベントを行っています。イモ山のフィールドでは、毎年12月に地元子ども会と協働事業で、椎茸狩りや手作りの工作やお母さん方の協力で「名物:椎茸入り豚汁」を作り、みんなで楽しく頂きます。去年は保護者も入れて103名の参加でした。今年も生駒市の市民活動支援制度を活用して、12月にイモ山公園で実施予定です。他には生駒市の樹林地バンク制度や花のまちづくりセンターのイベントへ協力しながら、緑の保全に向けて34名の会員と一緒に活動しておりますので、生駒市在住の皆さまのご支援を今後ともよろしくお願いいたします。

イベントレポ①
ならやまの自然観察&自然工作
バウムクーヘンを焼こう

8月26日(日)奈良県の「山と森林の月間」協賛イベント“ならやまの自然観察&自然工作バウムクーヘンを焼こう”をならやまで開催した。

7月21日(土)の“昆虫観察と自然工作”に続くイベントである。

参加申込が予定人数を大幅に超えたため、申込締切日までに



お断りする程の人気であったが、参加辞退の連絡や当日のキャンセルもあり、子供34名、保護者21名計55名の参加となった。

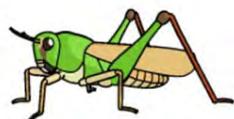
午前中はならやま里山林の観察をしながら遊びの広場に到着。子供たちはロープ渡り、ブランコなど自然の木を利用した遊具で楽しんだ。



昼食の前には冷たいジュースのもてなしをうけ、お弁当を食べ終わるころには、スタッフの手際よくバウムクーヘンを焼く準備もできた。

子供たちは顔を赤くしてバウムクーヘンがだんだんと太くなっていくのを楽しみながら竹をクルクルとまわし、焼きあがったところで

できあがり点を点検、あつあつのバウムクーヘンを試食した。



そこには子供たちの満足そうな顔、うれしそうな顔が並んでいた。



その後、子供たちはスタッフの助けを借りてノコギリを使ってはじめての竹切り体験。



最初うまく挽けなかった手つきも、だんだん力強くなっていく。



自分で作った竹ぽっくりをさっそく履いてみる。

足を持ちあげるタイミングと、ひもを引くタイミングが合わずによたよたとしていた子も、すこし慣れてくると自転車道のアスファルトで、いい音をさせながら闊歩していた。(高本 記)





8月29日(水) 10:00~15:30

- ・10:00~12:00 長居植物園自然観察
- ・13:00~14:30 大阪市立自然史博物館
佐々木大輔先生講演
- ・14:30~15:30 自然史博物館 見学

10時に「長居植物園」に集合。あいにく時折小雨のパラツク曇り空であったが、熱射が避けられ、かえって好都合であった。午前中は「自然教室チーム」の平岡、小田、辻本、川口、木村の皆さんのガイドで植物観察。サルスベリ、カツラ、ハス、フウ、アオギリ、



プラタナス、スイレン、イスノキ、ヒマラヤスギ、メタセコイア等の生態のしくみや不思議さなどの説明。ハスは盛りを過ぎていたが、スイレンが清楚な花を競っていた。昼食後は自由行動で、講演会の始まるまで各自園内散策。キバナコスモス、スイフヨウ、サルスベリが見ごろで満開。花壇一面に植えられていた橙色のキバナコスモスが圧巻だった。



13時から佐々木先生のご講演。先生は「菌類」がご専門だが、里山についても民俗学と生態学の両面から迫る研究も試みられていて「里山の自然」という本も書かれている。

講演のテーマは、「里山はどう使われてきたか — 利用の歴史から考える」。

スライドを使つての詳細な研究に基づくデー



タで示したお話であった。

『もともと近畿近郊の里山は、飼料、肥料、燃料、食料等の商品生産の場であった。これからの里山も何らかの形で商品生産の場にしないと復活しないのではないか。』『里山を利用する文化の育成が必要。』『里山は景観美というより機能美である。』等のお話が印象的であった。



終わって全員の記念撮影後、自然史博物館を見学。「自然と人間について考えてみよう」をテーマにした「身近な自然」「地球と生命の歴史」「生命の進化」「生物の多様性」「生き物の暮らし」についての展示が興味深かった。

午前、午後とも充実した「自然研修会」の日であった。
(寺田 記)

イベントレポ③

佐保台小学校 校庭の昆虫観察会

「自然教室チーム」

9月5日(水) 閑静な住宅地の一角にある自然豊かな佐保台小学校で「昆虫観察会」を実施しました。全校児童数が100名というこじんまりした学校で、放課後1年生～6年生までの児童を縦割りにし、6班に分けてそれぞれスタッフが付き、虫取り、虫のオリンピックなどをしました。

どの子がどの班か見分けるため、色分けしたテープを胸に貼ってもらい、虫取り網を渡していざ出発！班ごとに決められた虫籠に、捕っては入れ、捕っては入れ・・・と(自分で入れてくれればいいのですが、網を押さえたまま、おぼちゃ～ん捕れたでえ) あっちからもこっちからも呼ばれて大忙し。9月とはいえ残暑厳しい炎天下、スタッフも子供たちも汗ブルブル。おかげで校舎を一周する頃には、3つの虫籠は大小のバッタやコオロギ、トンボ、蝶などで満杯になりました。



2階の図書室に入りオリンピックの始まり・・・木村さんが作られた表に点数を入れていきます。珍しい虫を何匹捕ったか。(多い順に3, 2, 1点) ショウリョウバッタは何cmあるか。(大きい順に〃) 一番小さいバッタは何cmか。(小さい順に〃)

次はバッタ飛ばし競争。2m正方のビニールシートに、中心から10cm刻みに円を書いたものを敷いて、飛んだ距離を測る。まず5cm以上の虫を選んで

円の中心に置き、1班、2班、3班・・・と順に飛ばします。次は5cm以下の虫・・・次はコオロギ・・・と競争させていき点数を書き込んでいくのですが・・・

子供たちはどんどん熱が入り、シートの周りでワァワァキャアキャアと甲高い声を張り上げるし、バッタはシートの上で行儀よく飛んでくれれば計りやすいのですが、教室のあちこちまでひらひらひら・・・と飛んでいくのや、人の服やズボンに飛び移るのもおり、計測不能！やり直しが続出。虫を取り出す時に他の虫も喜んで飛び出してしまおうし・・・。



まあそれでも大汗をかきながら、木村さんと塩本さんが何とかそれぞれの班に、1位、2位、3位・・・と順位を決めて、お手製の金メダル、銀メダル、銅メダルを贈呈することができました。

男の子の中には、将来の木村さん、菊川さんになりそうな虫博士がいたり、あまり虫が好きでない子供たちも虫のオリンピックを楽しんでもらえたし、元気で明るい佐保台っ子の昆虫観察会は無事に終了しました。



子供たちが帰った後の反省会では、地域の方から「創意工夫した観察会をありがとうございました。」とか「佐保台に住んでいるが、網を持って虫取りをしている子供たちを見たことがない、自然に親しむこのような良い企画をありがとうございました。」などの感想をいただきました。私たちスタッフの感想は、「要所要所で子供たちを並ばせたり、静かにさせたり、ある程度けじめが必要では？」という意見も出ました。(放課後だったので開放感があつた?)

木村さん、菊川さんが「キリギリスやトノサマバッタが捕れたのは本当に珍しい」と盛んに感心しておられました。(青木 記)



『太安萬侶』の聖地を訪う



9月12日。近鉄奈良駅に26名参集。この朝天空はどこまでも碧く、乾いた空気が小さな秋を感じさせる。鈴木さん肝入りの生駒交通チャーター便で出発する。

先ず、鉢伏山南端を岩井川沿いに疾駆、田原此瀬町に入る。古代この地は天皇・貴族の葬送地として位置付けされていた。今は南斜面に茶畑が広がり、大和茶の産地として鄙びた風景を醸す。1979年茶樹を植え替え中、竹中英夫さんが偶然発見、発掘の結果、太安万侶の墓誌が出土し、高松塚古墳に次ぐ大発見として話題となる。

急斜面を登るとストーンサークルに象られた墓地が。墓標の側に1300年の眠りを告げ、一本の百日紅が供花の様に、印象的であった。安万侶の偉業が墓誌によって明らかとなり、古事記（フルコトブミとも言う）の編纂者として実在が確認される。当時の葬列、祭祀の衣装など、どんなものであったろうか。ロマンに思いを馳せ、後にする。



少し離れた光仁天皇陵・春日宮天皇陵・北浦定政顕彰碑を訪う。岩本

・杉本両氏の語り部宜しく北浦定政（江戸後期の国学者 条坊制の研究者）の功績、仏教偏重の政治を改めた光仁天皇の事績と皇統譜。春日宮天皇（施貴親王 歌人、光仁天皇の父。天皇の諡号を賜る）の事ども。熱い語りを拝聴する。

唐古・鍵遺跡。幾度かの発掘により弥生期の大環濠集落が明らかになりつつある。唐古池の一角にある出土土器の文様を復元した楼閣が面白い。遠見すると異国へ来たかと錯覚する程。近くに国の考古学ミュージアムがあり、唐古遺跡の成立ち、出土品が展示され、専属ガイドさんの説明を傾聴する。私の印象としては正にこの地は弥生時代のキャピタル（首府）ではなかったか。物流の要衝として文化の進化の源であったろう。

卑弥呼の誕生、ヤマト政権への繋がりには謎があるとしても、興味はつきない。

今日の主人公 安万侶の太（多）一族を祀る多神社を参拝。51代宮司 多 忠記さんから故事来歴を拝聴。平野部にある大社として広大な神域であったとか。確かに奈良の大社は全て山麓に建つ。安万侶の分骨が未だ農地法に阻まれ納骨されず、宮司の手元にあると言う。神も現代の法律には勝てぬものなのか。

最後に、橿原考古研博物館に入る。石器時代から縄文・弥生・古墳時代を経て、飛鳥・藤原京、奈良期・平安期・中世に至る文化遺産が整然と並び、宮山古墳、安万侶墓と墓誌の模造と実物に触れ、今回の締めくくりとして有意義であったと思う。

熱心に見学頂いたご参加の皆さんに敬意を表し、語り部の岩本・杉本・古川各氏のご協力に感謝申し上げます。また鈴木氏には裏方としてお世話いただき、お礼申し上げます。

次回を楽しみに。

（文責 川井）

光仁天皇陵に参拝して思う 二、三のこと

岩本 次郎

歴史文化クラブの9月12日の史跡見学では、奈良市の東山中、田原の日笠町に所在する光仁天皇陵が含まれていた。小生にとっては、36年ぶりの再訪であり、礼拝時に想起した二、三のことについて記したい。

まず、光仁帝は奈良時代末期の770年から781年まで在位したが、その人生は平穏ではなかった。壬申の乱(672年)で勝利した天武天皇の皇統が連続する奈良朝にあって、天武と対立した天智の皇子施基親王(志貴皇子とも記す)を父とする白壁王(のちの光仁)の政治的立場は微妙であり、保身のため「酒をほしいままにして迹(あと)をくらます。ゆえに害を免れた。」(『続日本記』即位前条)のであった。継嗣を決めずに没した称徳女帝のあとを継いだ時はすでに62歳であった。約10カ年の在位中には、詭言により、その皇后井上内親王と皇太子他戸親王が廃され、のち両人が同日に没するという事件や、東北地方では蝦夷の反乱が相次いだのであった。

次に、この御陵を幕末に修築した北浦定政のことを思うのである。元治元年(1864)2月3日に藤堂藩の御陵御用掛となった定政は、同月17日から12月23日までの間、全15回延べ約80日に亘って、古市から田原に出張し、御陵の修築事業に精勤した。伊勢の津に本拠を置く藤堂藩は約32万石のうち、山城国相楽郡と大和国添上郡～十市郡に約5万石の領地があり、それを治めるため、現奈良市古市町に藤堂藩城和奉行所を置いていたのである(市文化財の土蔵が現存)。

定政は文化14年(1817)、城和奉行所に出入りする掛屋(上納米を管理し、好機に換金し、出納する業)の長男として生まれた。16歳の時、父が没すると、定政は同奉行所銀札方御雇手代となった。定政は勤務の傍ら、和歌を本居宣長の孫本居内遠らに学び、やがて内遠

らの影響があったのか、国学に関心をもち、歴代の御陵の比定研究を推し進めて、嘉永元年(1848)に『打墨縄』を著した。これは各御陵間の道筋を地図に表し、その史料的根拠を示したものであった。さらに定政は自ら工夫した測量車(車輪1回転で6尺)を操り、また歩測(3歩6尺)も行い、田圃の間を実見して、その結果を『平城宮大内裏跡坪割之図』・『大和国坪割細見図』・『平城旧址之図』などとして発表したのである。

『打墨縄』を著して、山陵研究家として、識者の間に知られていた定政は、文久2年(1862)から始まる幕府の山陵調査に尽力し、翌年には藩士に列せられた。御陵御用掛となったのはこの時である。その後、神武御陵地比定の諮問、藤堂藩大和領内の志貴皇子(春日宮天皇)・光仁天皇・早良親王(崇道天皇)など3陵の修復を行ったとするが、光仁陵以外の修陵の実態はよく分からない。光仁陵は東西約38m、南北30mの不整形な円墳で、高さ約8m、墳丘を取巻いて石積みの外堤を築き、正面に前後2基の鳥居を設け、その鳥居に接続する垣を巡らせた拝所が設置された。

定政は明治4年(1871)、55歳で没するが、ここに後日譚を紹介しておきたい。定政の嗣子義十郎は明治20年代には宮内省諸陵寮の奈良県内における陵守長であったが、明治29年12月、平城宮跡が施肥の場となっていることを慨嘆する植木商棚田嘉十郎と出会い、亡父の「平城旧址之図」を嘉十郎に貸し与えるが、嘉十郎はこれをすぐに1万枚、のち2万枚を追加して自費で印刷し、平城宮跡顕彰運動の配布資料とするのである。嘉十郎は義十郎のことを「支部長さん」と呼ぶ間柄で、義十郎から県下の御陵生垣の植樹の仕事を受注したりしていたのである。

その後に嘉十郎の身边を襲う貧困・病魔との闘いの末、自死におよぶ凄絶ともいべき生涯については他書にゆずるが、定政の仕事が平城宮跡保存の原点となったといえよう。

Monthly Rep. ならやま

◆8/23 (木) 晴れ 40名+1名

8月26日の「山と森林の月間」協賛行事に向けて、バームクーヘン焼きの最終準備と森の中で子供たちが元気に遊んでもらおうと自然木を利用したブランコ、綱渡り、木登りなどの準備におおわらわ。また、マムシ対策のため、ベースキャンプ周辺の草むらの刈り払いにも力をいれた。

農園の方は秋の美味しいダイコン収穫を夢みて、栽培予定地の草刈り、石拾いなどの地味な活動が続く。

8月9日に播種したソバは、皆さんの心がけが良かったせいもあり、適度の雨が降り、一斉に芽を出した。

◆8/26 (日) 晴れ 28名+50名

天気もよく、終日子供達の元気な声がならやまに響き渡った。皆さんに喜んでもらえてイベントは成功であったが、当日のドタキャンが多かったのは残念であった。(イベントレポートを参照してください。)

◆8/30 (木) うす曇り 40名

仮称「第5地区」(自転車道の黒髪キャンプ場への分岐点近く)の基礎整備に着手。手始めに進入路に立ちふさがる枯れ木、痩せこけたスギ、背丈を越す笹林、つる草群などの



処分を開始した。刈り払い機とチェーンソーが主役となって大活躍。

農園は、夏野菜の後始末と秋野菜の準備に忙しい。

◆9/6 (木) 曇り 43名

第5地区の進入路の整備を継続。枯れ木の処分、笹群落の除去は抵抗が激しく、前進に手間取ってはいるが、一步一步着実に進んでいる。

農園では肌のきれいなダイコンをつくろうと栽培予定地の石拾いに力を注いでいる。ゴボウの収穫では、根が深く伸びているので(当たり前だが)掘り取りにはかなりの労力と手間がかかった。

ビオトープ池では2週間毎に池の生物調査を継続するとともに、アオミドロとの戦いに奮戦している。



◆9/13 (木) 晴れ 38名+2名

今日から活動時間は午後3時までとなった。第5地区の進入路の整備は順調で、あと一息で奥の広い路に出る所まで進んだ。

県から薪割り機を借用し、コナラの皆伐試験区で伐採したコナラの丸太を小割りした。



女性でもたやすく操作でき、瞬く間にたきぎの山ができた。

カシノナガキクイムシ?の侵入を受けたコナラの大木が4本見つかった。いよいよやっかいな虫のお出ましか??

農園ではナス・トウガラシ・ピーマンの生育が順調で、毎週かなりの収穫があり、参加者に喜ばれている。

ソバが白い花を一斉に咲かせ始めた。花壇では百日草の処分が終わり、コスモスへのバトンタッチが進んだ。(文責:木村 裕)



里山の今

自然観察レポ

*

花だより*

吉村 さつき

◆9/13 (木)

田んぼ横の湿地で身近な水草であったキクモ（ゴマノハグサ科）、昨年は見られなかったが、今年は花を咲かせています。水中から湿地に生息する植物です。水中葉は柔らかく水になびく様な茎と葉をもちます。花は咲かないで閉鎖花をつけます。水上葉は堅く肉厚で茎も太くなります。花は薄紫色の小さな花です。水中葉と水上葉では葉形が全く違います。水草水槽の世界ではアンブリアとかキンギョモと呼ばれています。

[草花] ヒヨドリジョウゴ、エノキグサ、コミカンソウ、センニンソウ、クワクサ、ダンドボロギク、チヂミザサ、ヤブガラシ、アキノノゲシ、ノアズキ、ツルマメ、メヒシバ、ヘクソカズラ、キツネノマゴ、ヌスビトハギ、オオバコ、ヒナタイノコズチ、ヒカゲイノコズチ、スズメウリ、ツククサ、タカサブロウ、ヨモギ

[花壇] サンジソウ、コスモス、ハナトラノオ、オミナエシ、ヒメヒマワリ、モミジアオイ

ニラ、ツルボ、ハナショウガ、ヒガンバナ、ミズヒキ、ギンミズヒキ



キクモ(水上葉)

[木の花] タラノキ、ヌルデ、クコ、フジウツギ

[木の実] オニグルミ、シバグリ、カキノキ、ヒサカキ

[ビオトープ付近]

キクモ、コナギ、ヒデリコ、イボクサ、チョウジタデ、ボントクタデ、イヌタデ

鳥だより

小田 久美子

◆9/10 (月)

菊川さんと田中さんと3人で回り、6種15羽を確認しました。鳥観台ではカラスの声が多くで一羽のみ、最後の日に4年間の鳥記録の中で一番少ない日になりました。山の中では、巨大キノコたちが腐乱していて、とても臭かったのも4年間で初めてでした。

9月で、4年間の観察会は終わりましたが、同じ条件で観察記録を継続して行きたいと思っています。



Gallery ならやま

「里芋」
有元 康人

「里芋の素朴さと玉葱の表皮の透明感を表現できればと画いてみました。」
(オイルパステル画)

里山の今

ならやまトピックス
菊川 年明

* ジャコウアゲハ*と*ウマノスズクサ* ……その後……

ウマノスズクサはたいへん強い植物である。全部の茎を嚙り取られて、丸坊主になっていたのであるが、また新しい芽や茎が生えてきて、安心できるところまで回復した。普段困らされているいわゆる雑草と同じように強い野生植物なのであろう。それに、根茎を植えていない場所からも、弱々しいが新しい芽を出している。気付かなかったが、花のいくらかは結実して、落下した種子から発芽したものであると思われる。

ちなみに、ウマノスズクサという名前は、実の形が昔、馬の首に吊された鈴に似ていることに由来すると言われている。とにかく不思議な形の花と実である。

このたびのウマノスズクサ全滅騒ぎ（8月下旬）の前後に蛹になったジャコウアゲハの幼虫は、9月の中旬から順次羽化（成虫のチョウになること）し、メスは新しく生長したウマノスズクサに産卵している。この期の親チョウが産んだ卵から孵化した幼虫は蛹になって冬を越し、来春に羽化する。



ところで、新しい幼虫が再びウマノスズクサの全滅騒ぎを起こすことがないように何等かの対策が必要である。長期的にはウマノスズクサの群落の箇所を増やすのはどうかと思っているが、当面は終齢間近の幼虫を飼育容器に移し、そこで短期間飼育し、容器の中で蛹化させたらどうか、と考えている。とにかく同じ失敗を繰り返さないようにしたい。

……

* ナツズイセン*

お盆過ぎのある日、ならやまへ昆虫観察に行った。ベースキャンプの東にある杉木立の中の自転車の傍に淡いピンクのナツズイセンが咲いていた。ヒガンバナ科の植物で、ずっと昔に



中国から伝わった帰化植物と言われている。翌々日には、残念なことに跡形もなく姿を消していた。

……

* 赤トンボ*

秋は赤トンボの季節である。赤トンボは文字どおりに解釈すれば赤いトンボはすべてとなるが、トンボの分類上ではアカネ属のトンボだけを指している。

ならやまでは、私はこれまでに9種の赤トンボを見つけているが、もう少しいるかもしれない。ならやまで普通に見かける赤トンボはナツアカネ、アキアカネ、リスアカネの3種である。



リスアカネのリスはスイスの昆虫学者の名前で、これに由来する。

赤トンボは、みな羽化したての頃はオレンジ色をしているが、日が経つにしたがって赤みが増してくる。オスは特に顕著で、秋の深まりとともに真っ赤になる。

ナツアカネとアキアカネはよく似ているがオスだけに限って言えば、ナツアカネは頭（眼）の先から尻尾（腹部）まで全部真っ赤になるが、アキアカネは尻尾だけが真っ赤になる。リスアカネは翅の端に濃茶色の部分があるので直ぐわかる。

里山の今

ならやまの獣

菊川 年明

タヌキ

タヌキの特徴である溜め糞と足跡があった。昨年11月、ベースキャンプに隣接する竹藪の裏に直径30センチ近くの溜め糞があった。カキの種の混じった糞も見られた。暫くはあったが、そのうちに利用しなくなったようで、雨に打たれて糞の山は崩れ、今では痕跡程度しか残っていない。

今年の春、降雨の後のまだ何も植えていない土の軟らかい畑にタヌキの足跡が続いていた。写真に撮り、足跡図鑑で調べたところ間違いなくタヌキのものであった。

ノウサギ

姿を見たのが1回、糞を見たのが2回である。姿を見た場所はベースキャンプの東の杉木立の先にある畑地であった。何年前か前、自転車道を西から東に向けて自転車で通っているときだった。最初は茶色の子犬がすわっているなと思った。子犬だけがいるのはちょっと奇妙だとも思った。自転車を止めて見ていると、こちらに向かって走り出したが、ぴよんぴよんと跳ねてくるので、その瞬間にウサギだとわかった。バッグからカメラを取り出しているうちにウサギは私に気づき、Uターンして畑を越え、山に逃げ込んでしまった。

糞はその後、ベースキャンプ近くの山林内で時をおいて2カ所で見かけた。

ヒミズ

ヒミズというのは小型のモグラの一種である。穴掘りの能力は強力ではなく、落ち葉の下や浅い穴に住み、ミミズや昆虫を捕食すると言われている。昨年晩秋の頃、ベースキャンプ前でバイクにでも轢かれたのかヒミズの死骸があった。

最近、ベースキャンプの一隅にホタルブクロを移植した場所があるが、今夏、何気なしに見ていると、地面が少し地割れして、上下にもくもく動いた。多分ヒミズに違いないと思い、手近にあった小さな棒をその場所に突き立ててみたが、もう何もいなかった。しかし、その辺りの地面の下を棒で探った感じでは小さな空洞ができていたようであった。

アカネズミ

今春、ならやまの山中で作業をしているとき、アカネズミに出会った。アカネズミは体長、尾長ともに10センチ前後の赤茶色のネズミで、森林、農地の畦、河川敷の藪などに住む。私の前に現れたアカネズミも目のかわいい、きれいな個体であった。

イタチ

駐車場の西端でイタチに出会ったこともあった。このイタチは私に気づかず悠々と歩いていた。毛並みが美しく、かわいらしい顔をしていた。あごの辺りから腹部にかけての白い色が印象的であった。かなり大きかったのでオスだったかもしれない。

爪の鋭い獣

一昨年夏、遊びの広場の少し東に樹液が出ているコナラがあった。クワガタなども来ているが、オオスズメバチも常連であった。それで注意を喚起するために樹液の出ているところをはさんで上下2カ所にピンクのリボンを巻き付けておいたが、暫くするとリボンはかきむしって落とされ、樹液の出ている幹には鋭い爪痕が残っていた。樹液が出ているのは私の首くらいの高さのところ、根元には木屑が落ちていた。爪が鋭くて、立ち上がると前足が私の首くらいの高さに届く獣は何であろうか。近頃、よく問題にされているアライグマかなと思ったりもしている。



やさしい昆虫講座 ②④ 木村 裕



菜食主義の権化たち

甲虫と言えば、カブトムシやクワガタムシを思い浮かべることと思いますが、今回は徹底した菜食主義を貫いている地味であり目立たないハムシー族を紹介します。漢字で書くと葉虫、親子ともども木の葉っぱや野草の葉を主食にし、ほとんどの種は人畜に対して無害で、つつましく生活を送っています。しかし仲間たちが500種もいると、ヒト族の住民といざこざを起こす事例も発生しています。

最もポピュラーな虫はキュウリ、メロン、カボチャの葉を齧ってコンパスで描いたように直系1cm前後の円で葉の表面を浅く齧るウリハムシ（成虫）です。長さ5 mm前後、黄色の長方形の甲虫で、人が近づくとこれはやばいと感じるのかパットと羽根を広げて飛び去るのでウリバエ（瓜蠅）のあだ名がついています。家庭菜園ではごく普通に見られます。幼虫は白いウジで、スイカの根が大好きで、地中の根に食い込んで内部を食い荒らします。元気であったスイカが梅雨明け直後に突然萎れて枯れるのはこの虫がおおいに関与しています。



ウリハムシ

キスジノミハムシは、ダイコン、カブラ、コマツナ、ハクサイなどアブラナ科野菜の小さな苗の葉に直径1~2mmの穴を穿ちます。2本の黄色の縞模様をあしらった黒いスーツを着用した紳士です。後ろ足の太ももが異常に太く、丈夫で、怪しい人物が近づくとピョンと飛び跳ねて

脱走を図ります。そのためノミハムシ（蚤葉虫）という名前を頂戴しています。子供さんは色白のウジですが、いつも地中に住んでいて、ダイコンの根の表面をかじって傷ものにするので、農家のおじさんやならやまの里山グループの面々からは嫌われています。

クコの葉を穴だらけにする犯人はご存知ですか？ トホシクビボソハムシと称し、親子ともども葉を主食にしています。成虫は長さ5 mm前後、やや痩せ型、地味な褐色の作業服を着た甲虫ですのであまり目立ちません。葉の穴あけ作業に従事するのはもっぱら幼虫ですが、体色は汚黄色でいつも自分が排出した黒い糞の塊を背中に乗せて姿を隠しているため、泥の塊にしか見えません。

このように糞をかついで歩く虫にユリクビナガハムシがいます。栽培ユリや野性のタカサゴユリの葉や茎を食い荒らし、蕾までも食べてしまいます。近年あちらこちらで発生していますが、虫は泥の塊にしか見えないので見逃されています。

春先、垣根のサンゴジュの新葉がぼろぼろになるのはサンゴジュハムシ親子が楽しい晚餐を囲んだ跡です。

最近増えているのがヒイラギ、ヒイラギモクセイ（ギンモクセイ）、イボタの葉を食べるヘリグロテントウムシハムシです。真っ黒な背広に2個の赤い日の丸模様を付け、ちょっと目にはテントウムシそっくりです。ヒイラギなどの新葉が汚くなっておればこの虫が活動した成果の現れです。



サンゴジュハムシ

鳥シリーズ

又々 カラスのお話です 小田久美子

9月の鳥観察はカラスが鳥観台で一羽(遠くで声のみ)。死因不明のカラスが二羽死んでいたようです。駐車場辺りに一羽吊って(一羽は木の下に)ありました。仲間とのコミュニケーションが発達しているカラスは、その死因と吊り下げられた仲間の姿の二つの理由で姿を消したのではないかと推測します。が、果たして、次に現れるのはいつでしょうか? 最近、日本の研究者がカラスの作り物をぶら下げて森を歩くとそれを見つけたカラスが鳴き出し、その声に反応して「なんだなんだ」とばかり続々集まって大騒ぎする映像を見ました。別の日アメリカの研究者が、グロテスクなお面を被って抱卵中のカラスの巣を覗き、後日親がその顔を覚えているか・子供たちに伝達しているかという実験では、卵だった子カラスもお面を付けて歩く研究者を見てちゃんと反応するという番組もありました。

私が鳥を見始めた4半世紀前、毎朝市場から出た車が信号停止する時魚を掠め取る映像を見ました。時間が判るのかしらと不思議に思ったものでした。その後、ゴミ出しのルーズな主婦を認識して荒らすのやら、走っている車の前にクルミを落として割らせようとするのやら、線路の石の下に収穫物を隠したり、幼稚園の石鹼泥棒が実はカラスだったと紙面を賑わしたこともあります。

数年前、コイカルが来たとき友人からのニュースで服部緑地へ行きました。コイカルが来なくて退屈している私の横で、カラスが自転車のキーを枯葉の下に入れているのを見ました。いたずら心を起こして彼(?)が枝で見ているのを確認して近くの枯葉の下埋めてみたら、

私がお場を離れるとサーッと降りて鍵を掘り出し少し遠くに埋め直しました。

彼らもしっかりマンウォッチングしているのが判ります。滑り台や屋根の斜面で何度も何度も滑って遊んだり、ゆとりある暮らし振りを知るとカラスには言語と文化があると思えませんか。

さて、2004(H16)年「鳥シリーズ」を書き始めたこの秋で丸8年経ちました。ここで一度お休みを頂こうと思えます。激励頂いた方々本当に有り難うございました。



地域情報 10月号

コサギ (斑鳩)

昨年1年間コサギを見ませんでした。川に行けばいつも見られる鳥の代表だったので心配していました。でも、今年の5月に1羽見て、8月には5羽一度に見ました。それから毎朝姿を見せてくれています。なんだかほっとします。

9月8日、イソヒヨドリのメスを2羽大和川で見ました。オスはよく見ますが、メスを2羽見るのは初めてです。オスに比べ地味なので、これは?と思いますよね。 (勝田 記)



美味旬感

アケビ

これも去年の秋に少し紹介してあるが、ならやまにもアケビの実がぶらさがっているのが見られます。なかなか野趣に富んだ里の贈り物です。

「アケビ」の名は秋に実が割れて口を開くので「開け実」とか、口を開かないムベ（トキワアケビ）と比べて「開けむべ」のなまったものと言われています。

春先に伸びた太い新芽は茹でて和え物やおひたしなどに出来るが、あくが強いので水にとってしっかり苦味を抜く。アケビ（5枚葉）よりミツバアケビ（3枚葉）の方があくが少ない。

花や葉は春に任せて、ここでは秋の大きな卵大の実を食しましょう。熟しパクッと割れると、中に白い半透明の果肉に包まれた黒い



今年も顔を出しました!!!

西谷 範子

種がどっさりつまっています。白い果肉ごと口に入れ、甘い汁だけを吸って種を吐き出します。この吐き出す種の数か半端じゃないので、ゆっくり味わってられません。

この皮に詰め物をして、蒸したり揚げたりする料理もあるが、硬いのと苦味が強く料理法はむずかしいです。まだ緑色の若い実は柔らかくあくも少ないので、種は取り除いて皮を拍子木ぐらいに切って空揚げか、天ぷらにするとなかなかの美味で、一見何の料理なのかなかなか当てられないからお試しあれ。

またあまり若くなくても、面倒だが外側の皮をむいて内皮だけにして茹で、水とその半量ぐらいの砂糖で煮てワインなどを加え、冷やして食べるのも一興ではある。

奈良学クイズ



問1】和州奈良之絵図（天保年代）

によると、奈良八景として

- ①南円堂藤 ②猿沢池月
- ③春日野鹿 ④雲井坂雨
- ⑤三笠山雪 ⑥東大寺鐘

などがあげられています。

あとの二景をお答えください。

（右の絵はヒントの一つ）

【問2】次の文章は、奈良県内のある寺院の仏像についてのものです。寺院名と仏像の正式名をお答えください。

明治20年にアメリカの哲学者フェノロサによって秘仏の禁が解かれ、人々の前にその美しい姿を初めて現しました。この時、フェノロサの驚き尋常でなく、門前から大和盆地を指して、「この界限にどれ程の素封家がいるか知らないが、この仏さま一体に到底及ぶものでない。」と述べたと伝えられています。



昭和20年6月、新国宝制度が発足すると第1回の国宝に選ばれました。この時指定された国宝仏はわずかに24を数えるに過ぎない。美術的な解説は多くの書物に述べられていますが、誠に、これ程美しく、その尊厳な姿に胸を打たれて、自然に手を合わせられる仏像は少ない。

木の实降り ひよ鳴き天平観世音

水原秋桜子

- ◆全問正解の方(1名)に、赤米を進呈します。(正解者多数の場合は厳正な抽選により決定)
- ◆当選者された方には、ならやまで進呈するか、遠隔地の方には宅急便でお送りします。
- ◆応募方法は、メールor葉書(編集チーム・鈴木宛)でお願いします。

※ 応募締切は、10月5日(消印有効)

季ときゆくや別れを告げる蟬しぐれ 八木順一

夏の挽歌。蟬声は葬送の楽章か。蟬もまた短命。里山へ向かうバイク運転中の作とか。ご注意を。

チエンソー木の傘消えて天高し 八木順一

間伐の機動の威力。忽ち空の領域が広がる。『天高し』秋の季語。秋本番は間近か。

展示いさなせる勇魚の骨に白雨かな 古川祐司

七月例会。長居博物館。勇魚は鯨の異称。突如激しい雨の洗礼。『白雨』は夏の季語。

唐古鍵二千年の田の稔り 古川祐司

歴・文クラブ九月研修会。唐古鍵遺跡を訪う。周辺は実りの秋を迎える。弥生期から綿々と続く稲作文化。



自然俳句

監修 川井秀夫

茶の花や鉄の起こしたものに骨 川崎和江

歴・文クラブ研修会・安萬侶墓の偶発的な大発見。『茶の花』は春の季語だが、発見は一月のこと。

秋茄子や紫紺の艶を誇らしげ 川井秀夫

今年の茄子は最高の出来。夏茄子に続き、衰え知らず。老体もかくあるべし。

安萬侶墓秋の茶山の無表情 川井秀夫

歴・文クラブ研修会。閑寂の茶畑に千古の眠り。初夏には茶摘歌でも歌いましょうか。

秋連れてふることぶみの古代文字 川井秀夫

『ふることぶみ』は古事記の別称。あちらこちらとロマンの道に尽きる事なし。

癒しの散歩道

谷川 萬太郎

秋の訪れに

涼しげな空の光さんさんと この身にふりそそぐ秋
 爽やかな風の光そよそよと この身を吹き抜ける秋
 穏やかな海の光ほのぼのと この身に浴びて照す秋
 緩やかな川の光なよなよと この身に僅に揺らめく秋
 人待ち顔の自然の光美しく そっと優しく微笑みかえす



今年の秋に恋して

人が心優しければ 自然はいつだって素直になれる
 嘆くまい自然の花よ 懐かしさと切なさを心に忘れず
 野菊の花のように 川のほとりでたくましく咲くがいい
 自然に誘われた私の心 いつからかこの地に降り立ち
 いつしか眼を細めながら貴方を優しくいたわるだろう
 偲び寄る秋のメランコリー 尾花の下の思い草に惹かれ
 夕日色褪せてもなお あなたの心はつつましく生きつづける

ならやま茶論

「オブザーバー」

竹本 雅昭



コシアキ：あれ、こんなところで何してんの。
トンボ

ウスバキ：おう相棒、人々の朝礼に勝手参加
トンボ してるのさ。

コシアキ：あのメガネのリーダーは？

ウスバキ：君あの人を知らないのか、失礼だぞ。
我々昆虫仲間について詳しく紹介
して下さってる偉い人だぞ。

コシアキ：その横の一番恰幅の好い人は？

ウスバキ：おいおい何も知らんのだなあ。この
会の会長さんととても子供好きでさ、
かみトンボの指導では十八番だぞ。
それからあの足長おじさんね、あの
人のお蔭で我々ヤゴから変身する前
に、ビオトープで大変お世話にな
ったんだぞ。

コシアキ：大変な恩人なんだ。これから寝る時
は向きを考えなくてはな。

ウスバキ：先日昆虫会の幹事会で、日頃お世話
になっている人々にお中元として、
各放送局へリクエストする事に決め
たんだ。曲はエルガー作「愛の挨拶」
美しい調べだから喜んでもらえると
思うよ。すでにクワガタ会長がテレ
パシーで発信されたよ。

コシアキ：あれはラジオ体操のテープだね、君
もやるのか。

ウスバキ：とんでもない。オスプレイ（輸送機）
の二の舞をやらかすと会から除名さ
れるからね。





遣隋使と日本外交

藤田秀憲

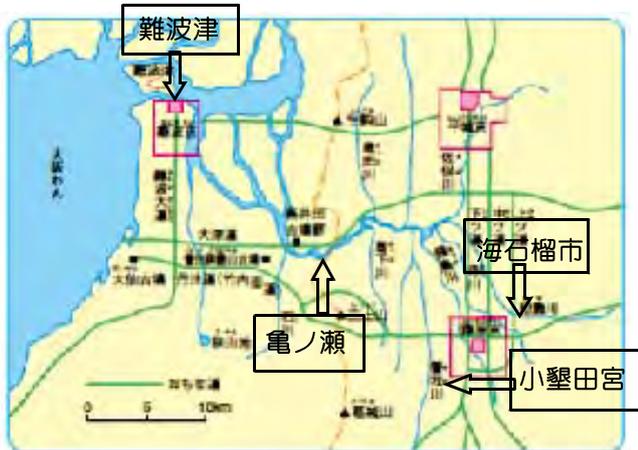
「日出處天子致書日没處天子無恙云々」
 (日出ずる処の**天子**、書を日没する処の**天子**に致す。恙なしや、云々)

「隋書の東夷伝 倭國傳」に記録された、607年7月、推古朝廷の聖徳太子が隋の皇帝に宛てた有名な国書の書出しである。これを見た煬帝は激怒し「蛮夷の書、無礼なる者あり。また以て聞するなかれ」と鴻臚卿(外交担当者)を叱りつけた。

しかし、当時対立関係にあった高句麗との戦いを有利にするため、朝鮮半島の背後にある倭国の存在を重視しその実情を調べるため文林郎裴世清を使者に送ってきた。

翌年の608年4月に、小野妹子(隋での呼称は蘇因高)は隋使の裴世清と従者12名を伴って、筑紫に帰着、難波吉士雄成が出迎え、6月に難波津の高麗館のほとりに新館を建てて饗応した。

8月に、一行は船で大和川を遡り、亀の瀬で平船に乗継ぎ、三輪の海石榴市(つばいち)に到着、額田部連比羅夫の飾り馬75頭の盛大な出迎えを受け、山田道を通って小墾田宮(おはりだのみや)に入った。



「大和川と古代の交通路」(日高正司)参照

裴世清の持ってきた書が「日本書紀」に残る。「其書曰、皇帝問倭皇。使人長吏大禮蘇因高等、至具懷。朕欽承寶命、臨仰區宇。思弘德化、覃被含靈。愛育之情、無隔遐邇。知皇介居海表、撫寧民庶、境内安樂、風俗融和、深氣至誠、達脩朝貢。丹款之美、朕有嘉焉。稍暄。比如常也。故遣鴻臚寺掌客裴世清等、稍宣注意。并送物如別。」

(皇帝は倭皇に問う。使人の長吏、大禮蘇因高らがやってきて、思いを全くした。朕は、(天の)宝命をよろこんで受け、天下を治めている。徳化をひろめ、全人類におよぼそうと思う。愛育の情は、遠くも近くもへだてない。皇が、海外に独居して、人民を撫で寧んじ、国内は安樂、風俗は融和し、深い氣(持)、至誠で、遠く朝貢を修めたのを知った。丹誠の善を、朕は褒めてとらせる。やや暖やかである。このごろはいつものようにかわりはない。鴻臚寺の掌客裴世清らを遣わして、ようやく注意を宣べる。あわせて物を送ること、別のものである。) <原本現代訳 日本書紀 山田宗睦訳より抜粋>

裴世清は役目を果たして9月に、第3回遣隋使の小野妹子に送られて帰国し、大和朝廷の礼式が優れていたことを、皇帝に報告した。

この時、高向玄理、僧旻、南淵請安など8人の留学生や僧侶もこれに同行した。

彼らは二十数年間にわたり隋・唐の制度・文物についての新知識の習得に努め、帰国後、日本の文化の発達や政治改革等に貢献した。



遣隋使の陶板画(金谷河川敷公園)

この後、614年6月にも犬上御田鍬が第4回遣隋使として派遣されるが、隋は高句麗への遠征に敗れ、間もなく内乱勃発、618年5月に唐が興る。遣隋使は630年の第1回遣唐使(犬上御田鍬)へとつながっていく。

以上が遣隋使の概要であるが、6～7世紀の東アジアの興亡は国内政治にも大きく影響し、当時の超大国である隋や唐に対応するため、朝鮮半島を介さずに国内制度を整備し、国の基礎を創り上げていく重要な時代であった。

ならやま景観整備 & 情報BOX

◆ 活動予定日 ◆

10月	4日(木) 25日(木)	11日(木)	18日(木)
11月	1日(木) 22日(木)	8日(木) 29日(木)	15日(木)

◆場所：奈良市奈良阪町・佐紀町の県有林
[ならやま会館前道路（ならやま大通り）の南側に広がる里山林地]

◆集合：現地ベースキャンプ地・午前9時

◆終了予定：午後3時

◆アクセス：

- ①JR平城山駅下車、東口から南へ徒歩10分
- ②近鉄奈良駅・バス13番乗り場
8：23発、高の原行き（平日）
- ③近鉄高の原駅・バス1番乗り場
8：33発JR奈良駅行き（平日）
- ②③とも「佐保台西口」又は「平城大橋」で下車 徒歩7分



◆携行品など：弁当、飲み物、軍手
(作業用具は現地で用意)



◆環境保護のため、

お椀、箸、コップなどは各自ご持参下さい。



◆連絡先 木村 裕 0742-46-4956



※ 県からの協力要請について

1. 11月2日(金)『古都連絡協議会主管課長会議』は、奈良県が主管で開催されます。その一環として「ならやま景観整備事業」の実情視察(1~2時間)に来訪されます。(古都管理係)
2. 11月8日(木)新規立ち上げの「奈良県景観サポーター」が、活動体験する場として、受講者の研修が、ならやまBCで実施されます。(景観保全審査係)

《歴史文化クラブ》11月研修会のご案内

歴史大好きの皆様、11月の研修会は、「蘇我氏の興亡の跡を訪ねて明日香路を歩く」をテーマに、古代日本史に大きな影響を与え、その後歴史の表舞台から去っていった蘇我氏にスポットを当てて、ゆかりの地を歩いてみたいと思います。

秋の明日香路を歩きながら1400年前の古代を振り返ってみましょう。意外な歴史の裏側が見えるかもしれません。多数の皆様のご参加をお待ちいたします。



《当日のスケジュール》

日時：11月27日(火)10時

集合場所：

近鉄橿原神宮前駅東口

行程：橿原神宮前駅 → (バス) 甘樫の丘 →
→入鹿首塚 → 飛鳥寺 → 飛鳥座神社
(昼食) → 県立万葉文化館 → 嶋の宮跡 →
→石舞台古墳 → (バス) 近鉄飛鳥駅

解散：午後4時ごろ

持物：弁当、雨具、筆記用具など

担当世話人：杉本 登



会員・家族芋掘り大会開催!

ならやまの景観は、6年目に入り、会員の皆さんの精力的な活動によって、日々見違えるように整備が進んでいます。



ならやまの畑は、秋の収穫期を迎え、サツマイモが順調に育っています。日頃のご努力に感謝の気持ちを込めまして、会員と家族の皆様方との親睦を深めていただく機会として、「芋掘り大会」を開催します。ご家族、お孫さんたち共々、里山の秋を満喫してください。

日時：10月20日(土)10時~

携行品：軍手、ビニール袋、弁当。飲物

連絡照会先：富井忠雄



行事案内



10月例会

大和の展望台「龍王山」へ登る

10月例会は軽登山です。頂上からは、国のまほろば大和平野を一望できます。大パノラマです。登りはじめ、下りはじめの30分はやや急ですが、ゆっくり歩きますのでどなたでも行けます。ただ靴はその凹凸のある滑りにくいものを履いてきてください。途中からの雨に備え、レインウェアもご用意ください。降水確率予報午前60%以上の場合、完全中止といたします。



日時：10月23日(火)
9時～15時

場所：「龍王山」585m
歩行距離 6.5km
実歩行時間約3時間30分

集合：JR柳本駅前 午前9時
(近鉄大和西大寺8:05-8:27近鉄天理
JR天理8:48-8:54JR柳本)

コース：柳本駅—柳本バス停—天理市トレイルセンター—長岳寺山門横—不動明王石像—龍王山山頂—長岳寺奥の院—龍王山古墳群—崇神天皇陵—柳本駅

担当：塩本 寺田



11月例会・一泊研修ご案内

熊野三山&丸山千枚田探訪

★日本最大級の棚田 丸山千枚田

山間地特有の棚田で高低差が約100m、訪れた人は、その美しさにまず言葉を失います。現在では約1340枚の田があり、日本一の文化遺産とも言われています。



★入鹿温泉&湯の口温泉

大自然を満喫し、日常の喧嘩から離れ、奥熊野の山河の幸を満喫！奥熊野の秘湯・溢れ出る良質の湯に身も心も癒やしてください。



★霊場 熊野三山「熊野詣」

紀伊山地の南東部にあり、相互に20～40kmの距離を隔てて位置する「熊野本宮大社」、「熊野速玉大社」、「熊野那智大社」の三社、「熊野参詣道中辺路」によって相互に結ばれています。三つの神社は個別の自然崇拜に起源を持つが、神仏習合の影響を受けて「熊野三所権現」として信仰されています。

【解散場所】近鉄大和八木駅南口(午後7時頃)
& 近鉄大和西大寺駅南口(午後8時頃)

行程

【第1日目】大和八木駅南口→R169→熊野市→R311→丸山千枚田→瀧流荘

【第2日目】瀧流荘→R168→熊野那智大社→熊野速玉大社→熊野本宮大社→谷瀬つり橋→大和八木駅→大和西大寺駅

*紀和町ふるさと公社の方に千枚田の案内とガイドをしていただきます。また、千枚田の実地見学は、瀧流荘のマイクロバスで行います。

◆持参品：第1日目の弁当(必携)

◆費用：22,000円(当日徴収します)

◆参加申込先：寺田孝

◆募集人数：約40人(締切：10月20日)

(希望者多数の場合、受付順にて決定します。)

担当：寺田孝・川井秀夫・弓場厚次・鈴木末一



奥熊野の秘湯へ



日程：11月12日(月)～13日(火)
宿泊：入鹿温泉ホテル「瀧流荘」
三重県熊野市紀和町小川口153
☎0597-97-1180
集合：近鉄大和八木駅南口・ロータリー
午前8時15分(時間厳守)

平成24年・9月度 幹事会報告

- ◆日時：平成24年9月4日(火)
17:15~20:00
- ◆会場：中部公民館
- ◆出席者：幹事14名、顧問2名
- ◆案件：
 - ① 会員動向、会計報告
 - ② 例会・イベント・ならやまP報告
 - ③ 佐保自然の森の植樹祭について
 - ④ 平成25年新春講演会について
 - ⑤ 一泊研修について
 - ⑥ 会報誌・HPについて
 - ⑦ 行事予定確認・その他

ペン画に寄せて 境 寛

奈良県高取町は日本一の山城「高取城」の城下町として栄えた。江戸時代から明治維新最後の城主植村家壺まで植村氏が14代にわたって城主であったが、明治6年(1873)廃城となった。明治20年(1887)頃まで天守をはじめとした主要建造物は城内に残っていたが、人里離れた山頂であるため管理されずに自然倒壊したとされる。

高取町は昔からの町家が、多く現存し、その当時の佇まいを残している。この町並の佇まいをひとつのテーマパークに見立てて、開催されるイベントが「町家の案山子(かかしめぐり)」です。(開催：10/15~11/14)



◆『Galleryならやま』欄を開設しました。皆様方が日頃取り組んでおられる、色々な作品(絵画・写真・書道等)を是非ともご寄稿くださるよう、

お願いいたします。

◆行事案内にも掲載していますが、有名な「安納芋」を100株栽培しています。除草シートの効果もあり、すくすくと育っています。「芋掘り大会」に是非お越しいただき、秋の味覚を是非とも味わってください。

◆今年の一泊研修は、丸山千枚田と奥熊野の秘湯、熊野三山を訪ねます。心身ともに癒やしましょう。乞う！ご期待！

◆9月号の奈良学&難読野菜名クイズは、全問正解者がありませんでした。平城宮跡の保存活動に尽力したのは、棚田嘉十郎と溝辺文四郎、さらには北浦定政等の名前が想起されますが、女帝元明天皇の座像を床の間に安置奉祀し朝夕礼拝することに決心したのは、溝辺文四郎さんです。

【問2】の答えは、①セロリ ②ブロッコリー ③アスパラガスでした。(里山人)

申し合わせ事項

ならやま環境整備活動や野外行事は、前日午後7時前のNHK TV天気予報で降水確率が午前60%以上の場合は中止になります!!



奈良・人と自然の会

会長 藤田 秀 憲

Mail : narayama@naranature.com

http://www.naranature.com



11月号の印刷・発送予定について

日時：平成24年10月26日(金) am 9:00~

場所：奈良市ボランティアセンター

奈良市法蓮町1702-1 TEL0742-26-2270

※皆様方のご協力をお願いいたします。



会報誌[ネイチャーなら]編集チーム・代表

鈴木 末 一